特別企画

第14回 金融教育に関する小論文・実践報告コンクール表彰式

前列左から：小谷 勇人氏、西村 仁明氏、横山 省一氏、小原 由紀夫氏

昨年12月26日、金融広報中央委員会は「第14回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール」の表彰式を都内会場にて開催しました。このコンクールは、毎年、全国の教育関係者の方々を対象に、金融教育に関する実践報告、研究結果、提言などを広く募集しているもので、昨年のコンクールでは、応募作品21編のなかより、特賞1編（実践報告部門）、優秀賞2編（実践報告部門）、奨励賞4編（小論文部門）、推奨実践事例賞1編（研究校部門）を優れた作品として表彰しました。

コンクールの概要

主　　催	金融広報中央委員会
後　　援	金融庁、文部科学省、日本銀行
応募資格	幼稚園教諭、小学校・中学校・高等学校・高等専門学校・高等専修学校教員、教職課程在籍または教職を目指す大学生、大学院生、大学教官等研究者
募集部門	小論文部門、実践報告部門、研究校部門
賞	小論文部門・実践報告部門 特賞：　1編（賞状・賞金30万円） 優秀賞：各部門2編（賞状・賞金10万円） 奨励賞：各部門3編（賞状・賞金3万円） 研究校部門 推奨実践事例賞：1～2編（賞状・賞金5万円）

吉國 眞一
金融広報中央委員会
会長

開催挨拶

金融教育は、子どもたちをはじめとする人々の「生きる力」、すなわち、自ら学び、考え、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を養うえで大変大事な役割を果たしています。

今回の入賞作品は、特賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞4作品、推奨実践事例賞1作品の合計8作品です。新たな視点や試みがなされ、「社会に開かれた教育課程」、「主体的で対話的な深い学び」という面でも取り組んでいただいており、金融教育が質・量両面で着実に発展してきていることを確認しました。

本日の受賞者の皆さま方には、学校におけるお金に関わる教育に情熱を込めて取り組んでいただき、また、深く掘り下げて論じていただきました。今後とも金融教育の一層の広がりに向けてご尽力いただきますようお願いいたします。

松島 斉氏
東京大学大学院教授

審査員代表による講評

今回のコンクールでは、2017年3月末に告示された次期学習指導要領に明記された「社会に開かれた教育課程」や「起業を通じた金融のしくみの学習」が金融教育において大変有意義な形で実践されていることを示す力強い作品が多数寄せられました。

昨今起業をテーマに取り上げている事例が多くなっていますが、実践的な問題解決を金融教育を通じて経験させることで起業に求められる優れたリーダーの発掘、グループとしてのアイデンティティの発揮に繋がるものと期待しています。小論文は奨励賞4編となりましたが、新たな視点や試みも多くあり来年も期待が高まります。

特賞、優秀賞、推奨実践事例賞を受賞された皆さまの優れた作品が広く取り上げられ、金融教育への機運がより一層高まることを願っています。

第14回 最終審査員（敬称略）

大杉 昭英　独立行政法人教職員支援機構次世代型教育推進センター 上席フェロー
神山 久美　山梨大学大学院准教授
河野 公子　聖徳大学大学院講師
松島 斉　東京大学大学院教授
向山 行雄　帝京大学大学院教授
内藤 誠吾　NHK制作局第1制作センター　経済・社会情報番組部長
鶴海 誠一　日本銀行情報サービス局長
吉國 眞一　金融広報中央委員会会長

最終審査会の様子

Prize Winner's

今回受賞された先生方に、金融教育に対する考え方や今後の取り組みについてお話を伺いました。

※ここで紹介した特賞、優秀賞、推奨実践事例賞の各受賞作品の全文は、「知るぽるとホームページ」でご覧いただけます。
https://www.shiruporuto.jp/education/contest/container/concours_kyoin/2017/

実践報告部門

特賞 アントレプレナーシップにおける金融教育
～東和中学校のアントレプレナーシップの実践報告～

西村 仁明氏
山口県
周防大島町立東和中学校教諭

筆者の勤務校では2011年より起業家のあり方（起業家精神）を学びながらさまざまな問題を解決していく学習プログラムに取り組んでいる。この実践報告は、2016年の取り組みを取り上げたものである。具体的には、実施計画と生徒の活動内容（模擬会社の設立、資金集め、仕入れ、販売、収支決算）を紹介し、これらの活動を通じて生徒たちがさまざまな力を身に付けた実績、そしてこの取り組みのキャリア教育としての意義について報告している。

なぜアントレプレナーシップに取り組んだのですか？

AIやICT機器の発達によって、現在人間が行っている仕事が今後ロボットに取って代わられることが想定されます。生徒たちが学校を卒業して職業を選択するころには、このことが現実味を帯びているかもしれません。どこまでロボットが人間を代替することになるのかは分かりませんが、これからの中学生には、新しい仕事を考え出す力、ロボットよりも人間が優位に立つと考えられる能力（創造性や企画力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力）を身に付けることが求められます。それは、まさに新しいことに挑戦する力を養うことにほかなりません。起業家精神を学びながらさまざまな問題を解決していく学習プログラムは、まさに現代の中学生に効果的な学習だと考えました。

取り組んでみて何が大きく変わりましたか？

販売実習にあたって、生徒たちは、実際に1株500円で会社運営資金を集め、これを元手に仕入れ交渉を行うとともに、協賛企業を募って新聞折込広告を出しました。この過程で、生徒たちはノルマを課せられ、また大人相手に厳しい交渉の局面に立たされることもありました。生徒たちは、こうした経験を通じて、人から預かったお金を管理することの責任や社会の厳しさを実感するとともに、重圧に押しつぶされることなく、むしろそうした苦難を乗り越えようとする気概を持つようになったと思います。さらに、仕事に対する考え方が大きく変化したからでしょうか、描いた将来の夢の実現を追い求めようとする姿勢もみられるようになったと感じています。

今後はどのように金融教育に取り組んでいくお考えですか？

課題として考えているのは、教員の人事異動があっても、この取り組みを本校において継続させるには何が必要かということです。この点は、論文でも触れたのですが、出資を募ってから販売実習、決算までの一連の流れに関する指導計画を明確にすること、この学習を通じて生徒に何を身に付けさせたいのかについて、教職員の共通理解を図ることが大切だと考えています。それが、販売実習を単なる「お店屋さんごっこ」にしないことにも繋がるでしょう。

ところで、起業に関する学習や金融教育は、通っていた学校でたまたま経験するというものではなく、小学校から高等学校まで、一貫して経験させることが大切だと思います。この点、本校の校区内にある小学校でも起業に関する教育に取り組んでいるほか、本校が連携型中高一貫教育を実施している山口県立周防大島高等学校は、地元漁協や企業など地域と連携して商品開発や販売を行うなどの活動が活発です。こうした恵まれた環境を生かして、小中高と連携した総合的なキャリア教育の実践にも取り組んでいきたいと思っています。

審査員の講評

次期学習指導要領に関連して注目される起業に関する授業実践について、商品企画、株主募集、道の駅での商品販売、会計監査を経て、株主総会の開催、配当まで、企業活動のより多くの側面を体験させる実践であり、「企業会計」にも触れている点が高く評価されました。

実践報告部門

優秀賞

六次産業化を意識した起業家教育

～中学生が地元の農作物を栽培し、商品開発・販売するまでの取り組み～

「日本の食料自給率を高めるために何が必要か？」。この問題を生徒たちと考えるなかで、筆者は、生徒たちが地域の生の声を聞き、農業が置かれている現状に向き合わなければ絵空事の学習に終始してしまうと考えた。そこで「六次産業化」のアイディアを取り入れたうえで、地域の六次産業化の中心に学校を据え、農家などの協力を得ながら中学生が自ら農産物を栽培し、その農産物を原料とする新商品の開発、販売を食品加工業者、小売店などと連携して行う授業実践を試みた。

小谷 勇人氏
埼玉県
春日部市立中野中学校教諭

なぜ金融教育に取り組み始めたのですか？

教師となって３年目に、公民で初めて経済分野の授業を行った際、生徒の「経済とか金融って難しいな」と困惑する表情を見たのがきっかけです。金融教育に力を入れる必要性を感じ、その最も効果的な取り組みが体験的な活動であるというところから自ら教材開発に乗り出しました。

取り組んでみて何が大きく変わりましたか？

１年間の取り組みのなかで生徒は、教師の指導を待つ受け身の姿勢から自分たちで課題を見出しては探究を繰り返すようになり、主体的な姿勢への変化がみられました。リーダーシップやコミュニケーション能力が向上するなど実生活にも大きな影響がみられました。多くの生徒に、自分も必ず何かを成し遂げられるのだという自信がついたように思います。さらに、生徒たちの地域に対する誇りや愛情を大いに喚起できたことも成果の一つです。

今後はどのように金融教育に取り組んでいくお考えですか？

今回の実践によって、指導計画の理論化や手順が学校の財産として共有できるようになりました。本校ではすでに他学年で同様の取り組みを始めるなど学年を越えて継続的に金融教育に取り組んでいく流れができつつあります。これが本校の新しい伝統になればと考えています。また、教科の垣根を越えて、全教科で一つの活動に従事できる取り組みを作りたいと思います。

審査員の講評

中学校における模擬企業設立の体験学習を地元企業と多角的に連携しながら丁寧に実施しており、地域創生にも繋がる内容であること、レポートとして大変よくまとまっていることが評価されました。

実践報告部門

優秀賞

経験学習モデルによる株式投資と経営の授業

～金融教育における主体的な学習活動の実践～

筆者は、教室での授業において、如何に具体的な経験を伴った授業を行うかという問題意識を持っている。その筆者は、中学３年生の社会科・公民分野の授業で投資と経営を取り扱うにあたり、株主・銀行・経営者の役割を演じるロールプレイングゲームを開発し、生徒たちがそれぞれの立場で資金を増やすことを考えさせた。論文では、この教材を使って、株式投資や企業経営に関する主体的な学びを実現した取り組みについて紹介している。

横山 省一氏
東京都
本郷中学校・高等学校教諭

なぜ金融教育に取り組み始めたのですか？

お金に関する最低限の知識や考え方をしっかりと身に付けることは、自分を守る力、つまり「生きる力」に直結します。金融教育は、生徒が社会に出たときに困ることがないようにするための取り組みの一環として始めました。

取り組んでみて何が大きく変わりましたか？

今回の実践では、「経験学習モデル」に基づく学習プロセスを実現しました。ビジネスに不可欠となる資金調達における直接金融と間接金融の違い、リスクとリターンの関係、情報を適切に理解し意思決定を行うことの重要性など、投資と経営ゲームを通じて金融全般に関わる深い学びを実践できたと思います。大学生向けのプログラムを中学生向けにアレンジしたのですが、ゲームを取り入れたことで生徒が主体的に参加し、教室が明るくなりました。また、生徒が学習に意義を感じながら授業を受けるようになりましたし、株価や金融政策などについて関心を持つ生徒も増えたように感じています。

今後はどのように金融教育に取り組んでいくお考えですか？

多くの教育関係者に私が開発した授業を実践してもらえたらと思っています。学校の特色によって、同じ内容の授業の実践からどのような結果が得られるかも研究できますし、金融教育の裾野も広がっていくのではと考えています。また、数学や理科など教科横断的な要素も取り入れた授業についても研究しています。

審査員の講評

ゲームとロールプレイングを取り入れることで生徒が楽しみながら学んでいる様子がうかがわれたこと、比較的限られた授業時間で株式投資と企業経営の仕組みを深く学ばせていることが評価されました。

推奨実践事例賞

みんなの山辺っ子カンパニー
～ブドウ作りから学んだこと～

前任校で行われていた「ブドウ栽培」は、児童にとっては「６年生になったからブドウを作る」といった受け身のものでしかなかった。筆者は、これを金融教育の視点から捉え直し、そこに「キャリア教育」、「商品作り」、「栽培と販売を通じて社会の仕組みを学ぶ」などの可能性を見出した。例年行われていた行事の再構成を試み、模擬会社を設立し、児童自身に企画実践させる形でプロジェクトを立ち上げ、ブドウ作りや販売活動に取り組むこととした。本論文は、約１年間をかけて行われた授業実践の記録を紹介したものである。

小原 由紀夫氏
長野県
松本市立島立小学校講師

なぜ金融教育に取り組み始めたのですか？

児童がさまざまな意見を出し合い、それを取り入れながら企画を立てることで、学習意欲を高め、金融経済活動の意義を理解してもらいたいと思い、金融教育に取り組みました。６年生の伝統行事であった「ブドウ作り」も、視点を変えれば地域との関わりを深めるだけでなく、キャリア教育に繋がる活動になると考えました。

取り組んでみて何が大きく変わりましたか？

最も変わったのはやはり子どもたちの意識です。これまで「やらされていた」ブドウ作りが、「自ら進んでやる」ことに大きく変化しました。自分たちの会社が作るブドウの収穫量と販売量を増やすには何をするとよいのか。市場調査を行い、需要と供給のバランスを考えながら自分たちで決定していく姿、修学旅行の前日まで作業を行う姿など驚きの連続でした。地域や保護者の方々からの積極的な協力も得ることができ、地元との結びつきを一層深めることにも繋がったように思います。

今後はどのように金融教育に取り組んでいくお考えですか？

現在は転勤に伴い学校が変わりましたが、ここでも金融教育の視点を取り入れながら地域の特色を授業に生かしていこうと考えています。まだ昨年のようなダイナミックな活動はできませんが、子どもたちの意欲を少しずつ高めながら、地元特産の「島立キュウリ」を素材にした金融教育を実践したいと考えています。

審査員の講評

地元の農産物であるブドウの栽培を子どもたちに丁寧に体験させており、地元企業にワインの醸造を委託している点や販売するうえで看板制作など工夫を凝らしている点などが高く評価されました。

さらに小論文部門の次の作品が奨励賞を受賞しました。（敬称略）

中学校社会科の歴史学習における金融教育の教材開発
～世界恐慌を題材に～
北海道教育大学札幌校 国際経済研究室
知野 菜奈美（4年）　板垣 知志（4年）
大沼 美咲（4年）　鈴木 柴乃（4年）
森本 拓斗（4年）　米山 朋希（4年）

ICTによるアクティブ型の金融教育を目指す
～ディーパーラーニング（Deeper Learning）による金融システムの理解～
難波 繁之（北海道 旭川市立愛宕東小学校特別支援教育指導員）

事前調査を踏まえた大学における金融教育の実践とその効果測定
西尾 圭一郎（愛知県 愛知教育大学講師）

大学における「金融教育研究の教育」の実践例
～新たな金融教育手法にかかる提言～
大倉 真人（京都府 同志社女子大学准教授）

※次回、「第15回 金融教育に関する小論文・実践報告コンクール」は、2018年6月ごろ募集開始予定です。

金融教育についてもっと知りたい方へ

今回の入賞作品に触れて、もっと金融教育のことを知りたいと思った方も多いことでしょう。そんな皆さんには、まず「金融教育プログラム－社会の中で生きる力を育む授業とは－」（全面改訂版）をひも解いていただきたいと思います。

この本では、現場の先生方および有識者の協力を得て、学校における金融教育をより効果的に進めるための小学校、中学校、高等学校における金融教育のあり方や関連する教科等の指導計画例を紹介しています。2007年２月に発行して以来、金融教育の体系書として全国の先生方に活用いただいています。

また、本誌「くらし塾 きんゆう塾」でも、金融教育の授業がどのように進められているのか、教育現場に立つ先生や授業を受ける生徒の姿をレポートする「金融教育の現場レポート」を連載しています。これまで、37名の先生方の授業をレポートしてきました。こちらもぜひ、ご覧ください。

「金融教育プログラム－社会の中で生きる力を育む授業とは－」「金融教育の現場レポート」は、知るぽるとWEBサイトでもご覧いただけます。

知るぽると　教育関係の方へ　検索
https://www.shiruporuto.jp/education/